様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８００８８

研究課題名（和文）危機言語継承教育に対する日本語教育の方法の適用―沖縄語を対象として―

研究課題名（英文）Application of the of Japanese pedagogy for endangered language education

研究代表者
花薗　悟（Hanazono, Satoru）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：４０３３４４５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄語には明治期以来の研究の蓄積があるが、外国語教育の方法にもとづいて語彙や文型を整理して学習するための教科書はまだ存在しない。本研究では、日本語教育の方法論を用いた文型積み上げ式の初級沖縄語教材を開発した。名詞文から始まり、身につけやすいものから複雑なものへと、既習の学習項目の上に積み上げていく形で文法事項を学習するように配慮した。沖縄語と日本語との共通性から、名詞文、形容詞文や動詞文の順で提出し、活用形、ヴォイスや待遇表現（敬語）までの流れを考慮してテキストを作成した。ただし、主題の形、動詞活用、指示語の用法など沖縄語と日本語とで異なる部分については提出順序や説明などを工夫した。

研究成果の概要（英文）：Although the Okinawan language has great accumulation of researches since the Meiji period, adequate textbooks to learn the vocabulary and sentence patterns of this language, based on the method of foreign language education does not yet exist . In this study, I selected a sentence pattern type in elementary Okinawan education, using the methodology of the Japanese pedagogy . Beginning from the noun sentence, I figured out sequence of sentence patterns from easy to learn into something complex . But since some Okinawan's grammatical categories are different from those of Japanese, for example, making topic form of nouns, verb conjugation or meanings of the demonstrative, I changed the order of showing the grammatical categories, and figured out explanations of meaning in some grammatical items.

研究分野：日本語学

キーワード：沖縄語　沖縄中南部方言　琉球語　日本語教育　危機言語教育

１．研究開始当初の背景

ユネスコ（国連教育科学文化機関）が 2009 年 2 月に発表した“世界消滅言語地図”には世界の言語のうちの 3000 語が「消滅の危機に瀕した言語」として挙げられているが、この中に日本国内に存在する言語であるアイヌ語（北海道），八重山語，与那国語，沖縄語，国頭語，宮古語（以上沖縄県），奄美語（鹿児島県），八丈語（東京都）が含まれている。

県内に５つもの「危機言語」をもつ沖縄県もこの事態には以前から気づいており、既に 2006 年 3 月に「しまくとぅば（「島言葉」＝各地域にみられる方言）の日に関する条例」を制定し方言の保存に積極的な姿勢を示しているものの、保存・継承のための教育が十分に成功しているとは言い難いとの報告もなされている。

そのような危機言語のひとつである沖縄語（沖縄中南部方言）の学習が困難である原因の一つとして、教科書をはじめとする教材・教授法の不備があげられる。

これまで、沖縄語は、各地の初等教育で継承教育の試みがなされてきているが、それらは一部の熱心な教師や地域の篤志家によるものであり、単語や発音の特徴の一部を教える、または挨拶言葉などの断片的な知識の伝授をするにすぎず、方言劇の上演など学習者が一見流暢に話せるように見えても、実は目標言語のセリフの丸暗記が中心であることが多いといわれる。また沖縄県内の大学など高等教育の場で沖縄語の授業が開講されることがあるが、シラバスを見る限りでは日本語教育などこれまで蓄積のある言語教育の方法論が適用されたものではなかった。

教科書などを見ても、沖縄語の研究には明治期からの蓄積があるが、教科書や学習所に着いて言えば、現在流通している沖縄語の教科書は、学校文法に基づいた項目の羅列であったり、独自に考案した文字の普及を目的とするものであったりして、外国語（第二言語）教育の方法論に基づくやり方でこの言語をシステマティックに学べる教科書は存在しない。

上記のようなことを勘案し、日頃から採択者が長年携わっている日本語教育で実践されてきた方法論を用いれば、沖縄語の体系的な教科書の作成が可能ではないかとの着想に至った。実際、日本語は沖縄語と系統関係が証明されている唯一の言語であり、文法や語彙に共通点が多く、日本語教育の方法論を応用することにより、体系的な沖縄語教育の教授法・教材作成が可能であり、学習の効率を高めることが出来るのではないかということが考えられた。

外国語（あるいは第二言語）教育としての日本語教育には、近代以降に話を限っても、19 世紀末頃からの実践があり、早い時期に対訳法にかわって直接法による教授が行われ、さらに既に戦前から直接法をどのように行うかについての論議が戦わされるなど多くの研究・実践の蓄積がある。

戦後もその方法は受け継がれ、オーディオ・リンガル・メソッド、80 年代後半以降のコミュニカティブ・アプローチの興隆などさまざまな教授法の流れが存在するが（近年は CEFR[ヨーロッパ言語共通参照枠)]に影響を受けた日本語教育の「スタンダーズ」がいくつか提案され、コースデザインの作成やシラバスの見直しなどが盛んに行われている)、現在日本国内で行われている初級日本語教育でも、媒介語を（可能な限り）用いない直接法での教授が主流となっていることは変わっていないといえるだろう。本研究では初級の沖縄語を文型積み上げ型で教授する教材を作成することを目標としている（大学での 1 年間［前期・後期、90 分×30 回］の授業、また教室での実際の授業にはコミュニカティブな手法を取りいれることを想定した)。教室内での使用言語を目標言語（本研究においては沖縄語）にすることにより、沖縄語でコミュニケーションする力（文法力、社会言語能力、談話能力）を向上させることができることとともに、文型積み上げ型であることで、学習者の状況に沿った形で教材を修正して使用すること（たとえば初等教育など利用できる時間数が制限されていて、作成した教科書の最初の数課分のみの学習時間しかない場合でも、そこまでの課で学習したことは話せるようになる）が可能なことである。この教材の開発により沖縄語の継承教育に新たな道が開かれることが期待された。

２．研究の目的

本研究は沖縄語教育に日本語教育の方法論を適用して、体系的な教授・学習のためのシラバスを構築し、それにもとづいた初級沖縄語教科書（文法解説書を含む）を開発することで、危機言語である沖縄語の継承に資することを目的とした（なお作成する教材は日本語を第一言語とする大学生を対象とし、1 年間の授業[前期・後期]で使用することを想定したものとした)。

３．研究の方法

(1)データベース作成

初級沖縄語教科書の文型策定の資料とするため、これまで行われてきた沖縄語の研究、特に文法についての項目を一覧できるようにデータベースを作成した。初級教科書の作成が目的であるため、初級日本語教科書の文型も入力し、沖縄語と日本語との文法項目がどのように対応しているか（あるいは対応していないか）について、一覧を作成した。語彙については初級日本語教科書の語彙をリストアップして必要な語彙をピックアップした。

(2)項目の選定

上で得られたデータから初級沖縄語教科

書で使用する文型と語彙とを選定した。初級日本語教科書を参考とはするものの、沖縄語に独自に見られる文法現象（たとえば、いわゆる「シヨッタ」形）については新たに項目を立てる必要がある一方、本研究で作成する沖縄語教科書は日本語を母語とする学習者を想定したものであるため、大筋ではおそらく日本語と大きな差はないと考えられる文法項目（たとえば沖縄語の格助詞「ぬ」［日本語で格助詞「の」にあたるもの］の連体用法）は扱いを軽くするなど、教科書を使用する対象者が日本語母語話者であることを勘案して文法・語彙項目を設定する予定であったが、日本語とあまり変わらないような文型であっても使用に慣れるということとは別であることがわかったため、日本語とあまり変わらない意味・用法をもつ文型にも触れるようにした。

(3)教科書の作成

上記で策定された文型・語彙をどのように並べるかについて検討し、大学の授業週数にあわせた教科書案を想定した。身につけやすいものから難しいものへと、効果的な学習が可能になるように配慮して配置を考える。一つの課に難しい項目が集中しないように、またひとつの文法項目であっても分散させた方がよい項目は、二つ以上の課に分割配置するなどの工夫をした。また、語彙についても学習の効率を考え、文型との相関を睨みながら課ごとの適切な配置を試みるようにした。

(4)各年度の経緯

2013 年度は初級日本語教科書を調査し、文型と語彙の選定を行い、まず文法解説の執筆を行った。沖縄語は日本語と祖語を同じにするが、細かいところでは異なるところも多々あり、そのまま初級日本語教科書の項目をスライドさせるわけにもいかないからである。その文法解説をもとに本文（例文と会話）を執筆した。

2014 年度は、全体を見ながら本文と文法解説を書きなおす作業を繰り返した。さらに練習問題を作成しながら、上述の作業を繰り返したのち、後期から学生（東京外国語大学学部生）を集め、教科書の試用を行った。2014 年度後期は 7 課までしか行けなかったので期間を一年延長した。

2015 年は多くの学生を集められたため、教科書の 27 課のうち 21 課までの試用を行うことができた。これらの実践の中で、授業をすべて直接法で沖縄語の教育を行うことは非母語話者には困難であること（特にアクセントやイントネーションなどの音声の面や、母語話者である教師が無意識に発話している言葉（間投詞や終助辞など）が実は学習にかなりの影響を与えていると考えられる）、文型（積み上げ式の）シラバスが有効であること、コミュニカティブな視点を取り入れた教授法も役に立つということがわかった。

４．研究成果

上記の目的に沿った形で教科書を作成した（pp.303+ x x)。会話の音声が録音できなかったことなどの課題は残されているが、第二言語教育の方法論に基づいて作成された初めての沖縄語教科書であり、これを出発点として他の危機言語の教育にも資する点は大きいと思われる。現在、勤務先の大学の授業でもこの教科書を使用中であり、実践の中でさらに改訂し、いずれは出版あるいは web 上での形で公開を予定している。

なお研究内容の一部は 4 篇の論文と２つの研究発表で発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①花薗悟「初級沖縄語教育における動詞活用の導入について」(『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』」42　東京外国語大学留学生日本語教育センター,2016 年 3 月,査読なし）

②花薗悟「沖縄語のカラ格について」(『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』」41　東京外国語大学留学生日本語教育センター,2015 年 3 月,査読なし）

③花薗悟「『現代首里方言』動詞のティ形について」(『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』」40、東京外国語大学留学生日本語教育センター, 2014 年 3 月,査読なし）

④花薗悟「日本語教育の方法論を応用した初級沖縄語教科書について」(『日本語・日本学研究』４ 東京外国語大学国際日本研究センター, 2014 年 3 月,査読あり）

〔学会発表〕（計 2 件）

① 花薗悟「外国語教育から考える沖縄語の学習と教育」(第 7 回琉球継承言語シンポジウム［沖縄キリスト教学院大学］　2015 年 3 月 7 日、招待）

②花薗悟「沖縄語首里方言の語頭声門破裂音の機能負担量」(日本言語学会 148 回大会［法政大学］、2014 年 6 月 8 日、査読あり）

2.

〔図書〕（計 0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
花 薗　 悟（HANAZONO Satoru）
東京外国語大学・大学院国際日本学研究
院・准教授
研究者番号：40334453